佳作

やさしい心をもつこと

愛知県　岡崎市立緑丘小学校二年　寺地　有彩

わたしもさきちゃんのような、ゆう気のあるやさしい人になりたい。わたしが『バスが来ましたよ』という本を読んでいちばんに思ったことです。びょう気で目が見えなくなってしまった山さきさんは、小学生のさきちゃんのやさしい声かけとお手つだいにたすけられながら、まい日バスにのってしごとに行きます。

目が見えないってどんなかんじなんだろう。そう思ったわたしは、アイマスクをつけて家の中をあるいてみました。アイマスクをつけると目の前がまっくらで、いつものへやなのにじ分がどこに立っているのかわからなくて、とてもふあんな気もちになりました。おかあさんに手をつないでもらいながらかいだんを上がってみました。一だん上がるだけでもとてもこわかったです。見えないことってこんなに大へんなんだと思いました。そしてわたしはこの体けんをしてから、人の顔を見て話すことやノートに字を書くことや、けしきを見ながらあるくことなど、ふだんじ分が何も思わずにやっていることが当たり前じゃないことに気がつきました。

「バスが来ましたよ」と山さきさんに声をかけたさきちゃんは、わたしと年が近い三年生です。もしわたしがさきちゃんだったら、この言ばを言えていたか分かりません。知らない大人に話しかけるのははずかしいし、じ分より体の大きな人のお手つだいをするのは大へんだと思ったからです。もしかしたらさきちゃんも、さいしょはわたしと同じように、知らない人に話しかけるのははずかしかったかもしれません。でも山さきさんのようすや気もちを考えてお手つだいをしたんだと思います。人の気もちを考えて、ゆう気を出して行どうできることはとてもすてきだなと思いました。そしてこのお手つだいは、さきちゃんが小学校をそつぎょうしたあとも、さきちゃんのすがたを見ていた下の学年の子たちがつづけたそうです。わたしは、さきちゃんのやさしい心がみんなにつたわったんだと思いました。わたしは、じ分がこまっているときに人にやさしくしてもらったとき、ふあんな気もちがへってあん心して、うれしい気もちになりました。そして、じ分が「ありがとう」と言ってもらえたときも、とてもうれしい気もちになります。わたしは、みんながやさしい心をもっていたら、きっとみんながしあわせな気もちになれるんだと思いました。みんながあい手の気もちを考えるやさしい心と「ありがとう」の気もちをもっていたら、かなしいことがへってみんながしあわせな、へいわなせかいになると思います。わたしも、じ分ができるしん切を見つけて人にやさしくしたいです。そしてさきちゃんたちのように「しん切のリレー」をつなげていきたいです。